

平成 25 年 6 月 28 日

各 位

会社名 株式会社 新生銀行
代表者名 代表取締役社長 当麻 茂樹
(コード番号 : 8303 東証第一部)

サラリーマンのお小遣いはバブル崩壊後ワーストを更新—「2013 年サラリーマンのお小遣い調査」結果について ～昼食代は 8 円増の 518 円とワンコインランチの傾向続く。1 ヶ月の飲み代 7,689 円は過去 2 番目に低い金額～

当行は、20 代から 50 代のサラリーマン約 1,000 人を対象にした「2013 年サラリーマンのお小遣い調査」を実施し、その結果を取りまとめました。

「2013 年サラリーマンのお小遣い調査」結果の主なポイント

- 平均お小遣いは月額 38,457 円(前年比 1,299 円減少)でバブル崩壊後ワースト更新。調査開始以来、過去 2 番目に低い金額
- 昼食代は前年比 8 円増の 518 円。ワンコインランチの傾向が続く
- 一回の飲み代は前年比 614 円上昇の 3,474 円だが、回数減少で、1 ヶ月の飲み代 7,689 円は 1999 年の調査開始以来、昨年に続き過去 2 番目に低い金額

4 月に実施した 2013 年の調査では、アベノミクス効果で一部の企業の業績も上向き、株価も上昇したとはいえ、サラリーマンのお小遣いにはまだその恩恵が十分におよんでいないという結果となりました。昇給の割合も下がり、節約をしている人が大勢を占め、お小遣いについては現時点ではまだ守りの傾向が優勢です。実際の家計においては、2012 年度には電気料金の上昇や円高に伴う一部の生活必需品や食品などの値上げなどがあり、また来年からは消費税の増税などが予定されています。

お小遣いを実際に上げた人、また、これからお小遣いを上げる予定とした人は昇給した人が多くを占めているように、“昇給”がお小遣い回復のキーワードとなります。収入の増加で家計の負担と将来の不安も緩和されること、その二つの条件が整えばお小遣いのアップ、ひいては安定した消費回復につながっていくことでしょう。

■ サラリーマンの平均お小遣いは月額 38,457 円(前年比 1,299 円減少)でバブル崩壊後ワースト更新

2013 年調査の「サラリーマンの平均お小遣い額」は、昨年の 39,756 円から 1,299 円減少して 38,457 円となり、バブル崩壊後のワーストであった 2011 年の 38,855 円より低くなり、かつ、1979 年の調査開始以降 2 番目に低い金額です。(最低額は 1982 年の 34,100 円。)

30 年以上のデータの蓄積がある当調査からは、バブル崩壊後は、お小遣い額は日経平均株価に 1 年から 2 年遅延する形で相関が見られました。2012 年 12 月 31 日の日経平均株価終値は前年から 1,940 円増加した 10,395 円となりましたが、株価との連動でみても、お小遣い額にはまだ回復の兆しは見えていません。(別添 1「日経平均株価とサラリーマンの平均お小遣い額の推移」ご参照)

■ 昼食代は前年比 8 円増の 518 円。ワンコインランチの傾向が続く

昼食代は 2012 年より 8 円上がって 518 円となり、2010 年以降のワンコインランチの傾向が今も続いています。昼食の内訳は、「持参弁当」(30.7%)、「購入した弁当」(24.9%)、「外食」(19.2%)の順に割合が多くなっています。「外食」と「持参弁当」については、昨年よりも割合が増える結果となっています。

■ 一回の飲み代は前年比 614 円上昇の 3,474 円だが、月の飲み回数は 0.2 回減少し、2.2 回

一回の飲み代は、2012 年から 614 円増えて 3,474 円となり、2011 年の 3,540 円並みに回復したものの、1999 年の調査開始以来、3 番目の低い水準となっています。1 ヶ月の平均飲み回数は前年比 0.2 回減少し、2.2 回となり、1 ヶ月の飲み代(月の回数に一回の飲み代をかけたもの)でみると 7,689 円となり、増加額は 746 円となっています。これは、調査開始以来、2 番目に低い金額となります。(最低額は 2012 年の 6,943 円。)世代別でみると、一回の飲み代も回数も増えた 50 代が、昨年よりも 4,110 円の大幅増加の 10,619 円となり、飲み代の回復を牽引しました。

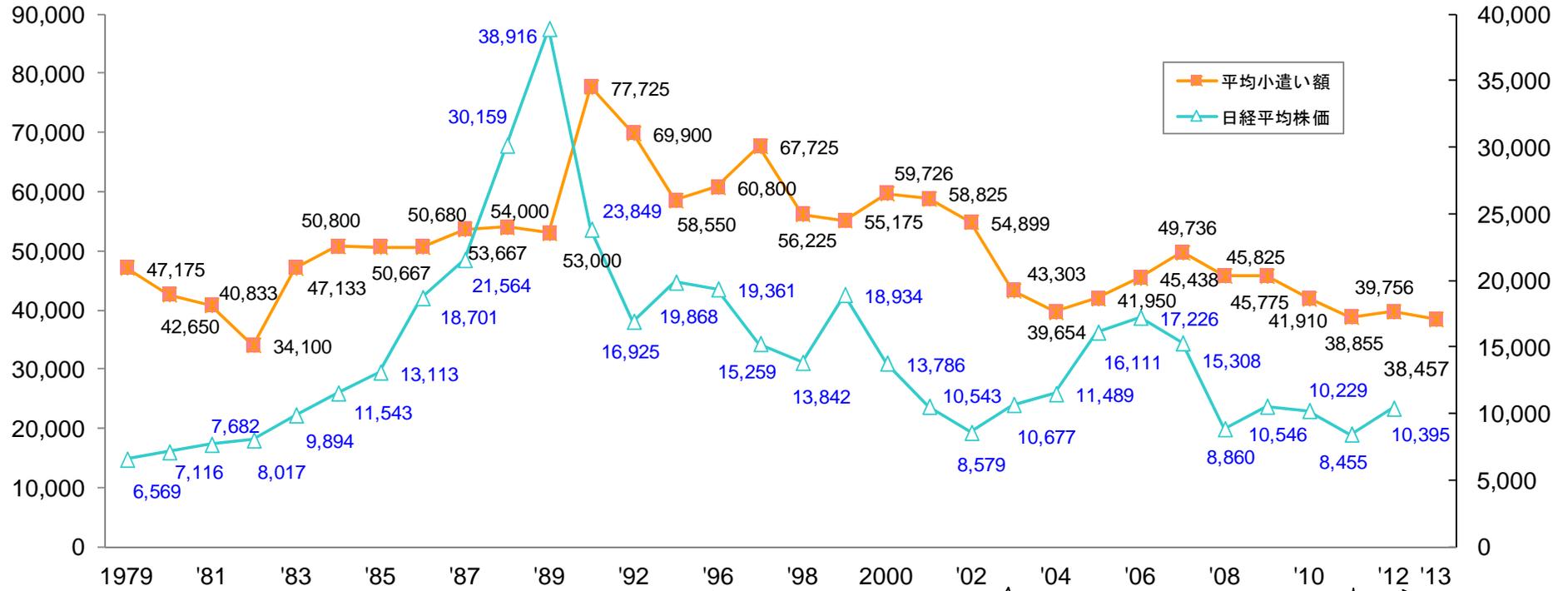
本調査の詳しい調査結果については、別添 1「日経平均株価とサラリーマンの平均お小遣い額の推移」、別添 2「2013 年サラリーマンのお小遣い調査詳細レポート」をご参照ください。

以上

お小遣い額 (単位=円)

日経平均株価とサラリーマンの平均お小遣い額の推移(1979年～2013年)

日経平均株価 (単位=円)



'82 東北新幹線開通
500円硬貨発行

'83 東京ディズニーランド開業
ファミコン発売

'90 消費税導入
平均株価史上最高値
(バブル経済絶頂期)

'96 阪神淡路大震災
金融破綻相次ぐ

'00 iモード人気
地域振興券配布
商工ローン問題

'03 小泉政権誕生
米国同時多発テロ
皇太子殿下ご夫妻
に愛子内親王殿下
ご誕生

'08 リーマン・ブラ
ザーズの破綻に
よる世界的金融
危機

'10 政権交代で
民主党政権誕生

'11 東日本大震災
円高の進行
地上デジタル放送開始

'12 東京スカイツリー開業
社会保障・税一体改革閣
連法成立
衆院選で自民党が与党へ
返り咲き、安倍内閣発足
アベノミクスによる円安進
行、株価の回復

※ 1978年以前と、1991年及び1993年、1994年については調査を実施していません。
※ グラフ中の日経平均株価は、年次データの終値を表記しています。

新生銀行 「2013年 サラリーマンのお小遣い調査」

詳細レポート

サラリーマンのお小遣いはバブル崩壊後ワーストを更新

- * サラリーマンの平均お小遣い額は38,457円(1,299円減)でバブル崩壊後ワースト更新
1979年の調査開始以来、過去2番目に低い金額
- * 昼食代は8円増の518円。ワンコインランチの傾向は変わらず
- * 1回の飲み代は3,474円となり、昨年よりも614円上昇。回数は0.2回減の月に2.2回
飲み回数は減少して一回の飲み代を増やす傾向で、1か月の飲み代7,689円(746円増)
は1999年の調査開始以来、昨年に続き過去2番目に低い金額
- * お小遣いを「上げる予定」とした人はわずか6%。お小遣いの回復は“昇給”が鍵に

- 本調査は1979年以来、30年以上にわたり実施しています。(1991年、1993年、1994年を除く)
- 時系列で「日経平均株価とお小遣い額の推移グラフ」を添付しています。ご参照ください。
- 「サラリーマンのお小遣い調査30年白書」を含む調査結果は、ウェブサイト「ライフスタイル・ラボ」
よりご覧いただけます。(<http://www.shinseibank.com/cfsg/>)

本調査に関するお問い合わせは下記までお願いします。

新生銀行 IR・広報部 大高・江口
Tel. 03-6880-8303 / Fax. 03-4560-1706

<2013 年調査結果について>

■ 2012 年度の景況と家計の収入と支出 ～収入の低下は続くが、景気回復の期待が高まる中、消費は好調

2012 年度を振り返ると、前半は景気回復の兆しが見え始めてきたとはいえ、大手電機メーカーが相次いで赤字決算、リストラを発表。また、企業年金の消失問題が発生するなど、景気回復を後押しできるような話題はあまり見られませんでした。後半は、近隣諸国との領土問題により、大規模な反日デモが発生して多くの企業が被害を受けるなど、一時緊張も走りました。しかし、一転して年末には、自民党の与党復活とアベノミクス効果により、急激な円安と株価の回復が続き、安倍政権の呼びかけでいくつかの企業が賃上げを表明するなど、景気回復の期待が高まりました。

実際の収入と支出を見みると、一般社団法人日本経済団体連合会の調査では 2012 年の夏季・冬季賞与は前年比マイナスとなり、また、国税庁の民間給与実態統計調査においては、2011 年 12 月 31 日時点の民間の平均給与は 409 万円と前年を 3 万円下回るなど、前年比では収入の低下は続いているようで、生活実感としては厳しい年であったようです。一方、今年に入ってから消費は好調を保っており、総務省の家計調査では、1 世帯当たり（2 人以上世帯）の消費支出は、2013 年 1 月から 4 月まで前年同月比で実質増減率がプラスとなり、百貨店では 4 月は前年同月比でマイナスになったものの、3 月までは連続してプラスになるなど好調で、特に宝飾品などの高額商材が好調に推移しているようです。景気の先行き感については、内閣府の景気ウォッチャー調査によると、景気の現状判断 DI、先行き判断 DI とともに基準値となる 50 を上回っている状況が続いており、「景気は持ち直している」としています。

■ 2013 年サラリーマンのお小遣い ～守りの傾向が優勢、お小遣いアップは収入の増加による家計負担と将来の不安の緩和が鍵～

今年サラリーマンのお小遣い調査では、昨年少し回復したお小遣いも、1,299 円減って 38,457 円となり、バブル崩壊後のワーストであった 2011 年の 38,855 円を下回りました。これは、1979 年の調査開始以来 2 番目に低い金額です。昼食代の平均金額は 518 円と昨年から 8 円のアップで、ワンコインランチの傾向が続いています。一方で 1 回の飲み代は 614 円上昇の 3,474 円となりましたが、その回数は減少して、1 か月の飲み代の合計額は 746 円微増の 7,689 円に留まっています。生活実感としては引き続き苦しいとする状況の中、約 7 割の人が何らかの節約策をとっており、昼食代や水筒持参で出費抑え、足りない場合はガマンしつつも、一部の人はアルバイトを含む副収入で補う姿も垣間見られます。

このように、アベノミクス効果で一部の企業の業績も上向き、株価も上昇したとはいえ、サラリーマンのお小遣いにはまだその恩恵が十分におよんでおらず、現時点ではまだ守りの傾向が優勢です。

今後のお小遣いの回復は、昇給の状況とお小遣いとの関係（9 ページ）、「お小遣いアップの可能性」の設問（22 ページ）にあるように、「昇給」がキーワードとなります。収入の増加による家計負担と将来の不安の緩和という二つの条件が整えば、お小遣いのアップ、ひいては安定した消費回復につながっていくことでしょう。この景気回復基調が確実なものとなり、サラリーマンの収入も増え、それがお小遣いにも現れてくることを期待したいと思います。

＜調査設計＞

- ◆ 調査時期 2013年4月20日、4月22日の2日間
- ◆ 調査方法 インターネットによる調査（専門の調査会社に依頼し、全国からサンプルを収集）
- ◆ サンプル数 合計2,000名（全国の男性サラリーマン約1,000名、20代から30代の女性会社員、男性・女性パート・アルバイト約1,000名）
- ◆ サンプル内訳 （上段：人数 下段：%）

世代別		20代	30代	40代	50代	Total
男性 サラリーマン	実数	262	262	262	262	1,048
	比率	25.0%	25.0%	25.0%	25.0%	100%
女性 会社員	実数	134	134	-	-	268
	比率	50.0%	50.0%	-	-	100%
男性 パート・アル バイト	実数	263	262	-	-	525
	比率	50.1%	49.9%	-	-	100%
女性 パート・アル バイト	実数	134	134	-	-	268
	比率	50.0%	50.0%	-	-	100%

未既婚		未婚	既婚	Total
男性 サラリーマン	実数	474	574	1,048
	比率	45.2%	54.8%	100%
女性 会社員	実数	189	79	268
	比率	70.5%	29.5%	100%
男性 パート・アル バイト	実数	488	37	525
	比率	93.0%	7.0%	100%
女性 パート・アル バイト	実数	124	144	268
	比率	46.3%	53.7%	100%

子供の有無		子供なし	子供あり	Total
男性 サラリーマン	実数	601	447	1,048
	比率	57.3%	42.7%	100%
女性 会社員	実数	214	54	268
	比率	79.9%	20.1%	100%
男性 パート・アル バイト	実数	493	32	525
	比率	93.9%	6.1%	100%
女性 パート・アル バイト	実数	163	105	268
	比率	60.8%	39.2%	100%

パートナー就業		共働き ・パート	無職/ 専業主婦	Total
男性 サラリーマン	実数	319	255	574
	比率	55.6%	44.4%	100%

※「パートナー就業状況」の%では母数は574人（=既婚者総数）

世帯年収		300万円 未満	300~500万 円未満	500~700万 円未満	700~900万 円未満	900~1500万 円未満	1500万円 以上	Total
男性 サラリーマン	実数	138	313	249	154	156	37	1,048
	比率	13.2%	29.9%	23.8%	14.7%	14.9%	3.5%	100%

- ★ 表・グラフ内の数字は、特に注記がない場合は全て円です。
- ★ 「サラリーマンのお小遣い調査30年白書」（平成24年9月24日リリース）の発表にともない、過去の調査結果に関する数字は30年白書のものに統一しています。
- ★ 調査対象のサンプルは毎年異なります。
- ★ 表の緑の網掛けは、2011年より追加調査を行っている男女20代~30代の男女（約1,000名）の対象者となります。
- ★ 4ページからの調査結果は、サンプルのうち、全国の男性サラリーマン約1,000名の調査結果をまとめたものです。

<調査結果の概要>

- 【1】サラリーマンのお小遣い額**.....5
- サラリーマンの平均お小遣い額は38,457円（1,299円減）で、バブル崩壊後ワーストを更新。
昇給した人の割合も引き続き減少し、お小遣いが減った人が優位。
- 【2】サラリーマンの昼食事情**..... 11
- 昼食代は昨年から8円上がって518円となり、ワンコインランチの傾向が続く。
「持参弁当」30.7%と「購入した弁当」24.9%が最も多いが、「外食」19.2%の割合も昨年より増える。
現在のランチについて、71.6%が満足と回答。
- 【3】サラリーマンの飲み事情**..... 14
- 一回の飲み代は昨年から614円増えて3,474円。
月の回数は0.2回減って2.2回となり、回数を減らして単価が上がる傾向に。
特に40代、50代の飲み代の増加が顕著。
- 【4】お小遣いの使い道、やりくり術**..... 17
- 必要不可欠な使い道は、「昼食代」53.6%、「飲み代」37%、「趣味の費用」35.1%。
「飲み代」は3位から2位に浮上。
約7割が何らかのお小遣いの節約策をとっており、一部では「副収入」などで補てん。
- 【5】不安に感じていること**..... 20
- 「自分の将来」54.4%、「老後」53.5%、「年金」41.8%が3大不安。
「政治」に対する不安は大幅減。
- 【6】お小遣いアップの可能性**..... 22
- お小遣いを「上げる予定」とした人はわずか6%。
お小遣いの回復は“昇給”が鍵に。

【1】サラリーマンのお小遣い額

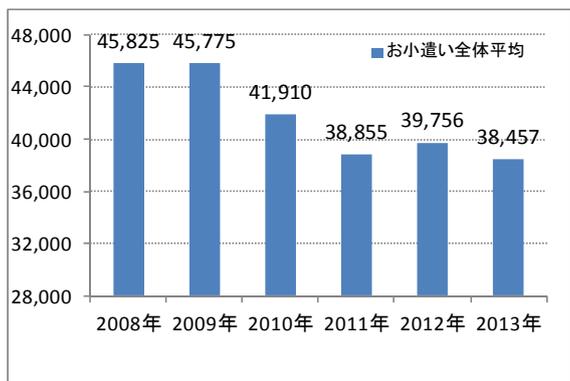
サラリーマンの平均お小遣い額は38,457円（1,299円減）で、バブル崩壊後ワーストを更新。昇給した人の割合も引き続き減少し、お小遣いが減った人が優位。

■ 月の平均お小遣い額

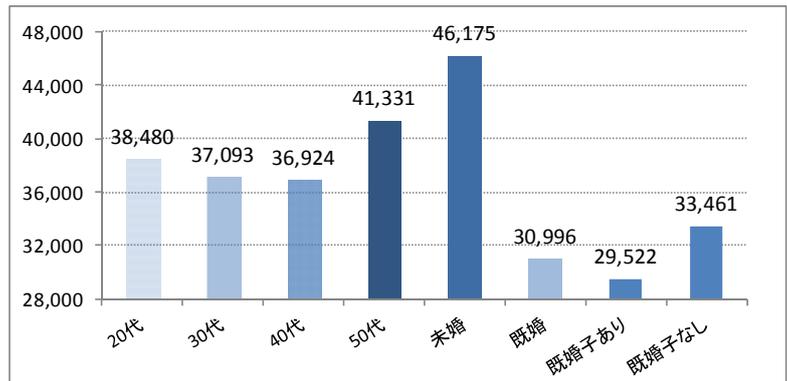
サラリーマンのお小遣い額は、昨年の39,756円から1,299円減って38,457円でした。バブル崩壊後のワーストであった2011年の38,855円より低くなり、かつ、1979年の調査開始以来2番目に低い金額です。（最低額は1982年の34,100円。）

30年以上のデータの蓄積がある当調査からは、バブル崩壊後は、お小遣い額は日経平均株価に1年から2年遅延する形で相関が見られました。2012年12月31日の日経平均株価終値は前年から1,940円増加した10,395円となりましたが、株価との連動でも、お小遣い額にはまだ回復の兆しは見えていません。

設問：あなたの1か月のお小遣いはいくらですか？（昼食代含む）



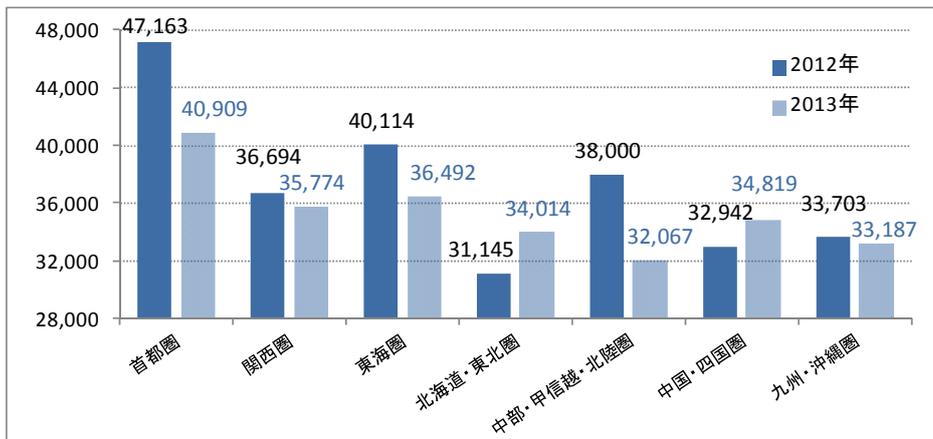
サラリーマン全体の平均（2008年～2013年）



サラリーマンの世代別、未既婚別、既婚のうち子どもあり、無しの平均

世代別にみると、昨年の傾向と同様に50代のお小遣いが一番高く、40代が一番低くなっています。昨年との比較では、40代は469円増、50代は56円の微増となりましたが、20代が2,743円減、30代が2,976円減と大幅な減少となり、主に若い世代で大幅に下げたことがお小遣い額を全体的に引き下げています。

未既婚別では、若い世代が中心の未婚層が4,219円下げて46,175円となりましたが、既婚30,996円との差は大きく、その中でも子どもがいる層は30,000円を下回る29,522円となっています。



地域別では、首都圏が一番高額ですが、昨年からの下げ幅も6,255円と大きくなっています。下げ幅では2番目に中部・甲信越・北陸圏で、昨年比5,933円の下げ幅です。昨年と比べて地域差が少なくなっていることも特徴です。

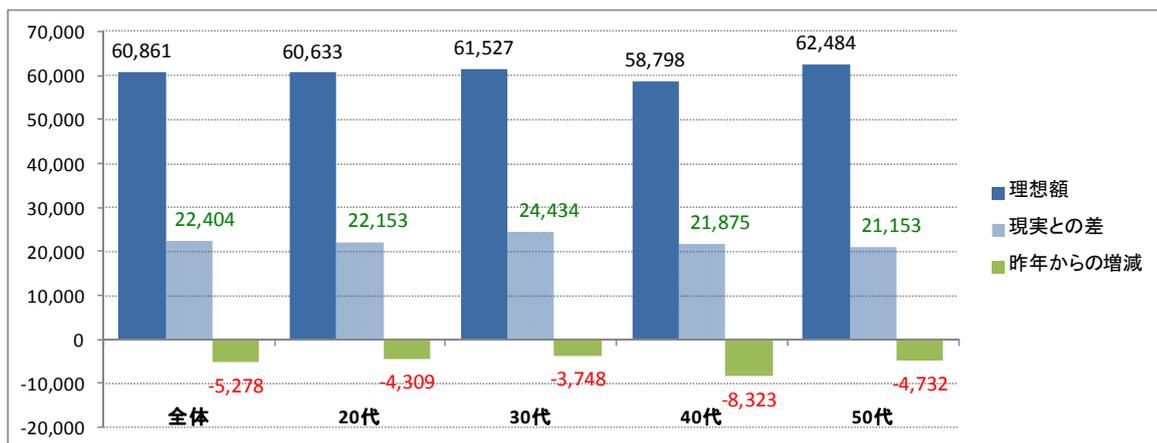
住んでいる地域別のお小遣い平均額

対象となる地域は、首都圏（東京・千葉・神奈川・埼玉・栃木・茨城・群馬）、関西圏（大阪・京都・奈良・兵庫・和歌山・滋賀）、東海圏（愛知・静岡・三重）、北海道・東北圏（北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島）、中部・甲信越・北陸圏（山梨・長野・岐阜・新潟・富山・石川・福井）、中国・四国圏（岡山・広島・鳥取・島根・山口・香川・徳島・愛媛・高知）、九州・沖縄圏（福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄）

■ 理想のお小遣い額

理想のお小遣いの平均額は 60,861 円となり、前回の 66,139 円から 5,278 円の減少となりました。減少幅は実際のお小遣い額の減少幅よりも大きくなっています。また、理想額と現実額の差は 22,404 円となり、前回の 26,383 円の差から縮小しています。

設問：あなたが理想とする1か月のお小遣いはいくらですか？（昼食代含む）



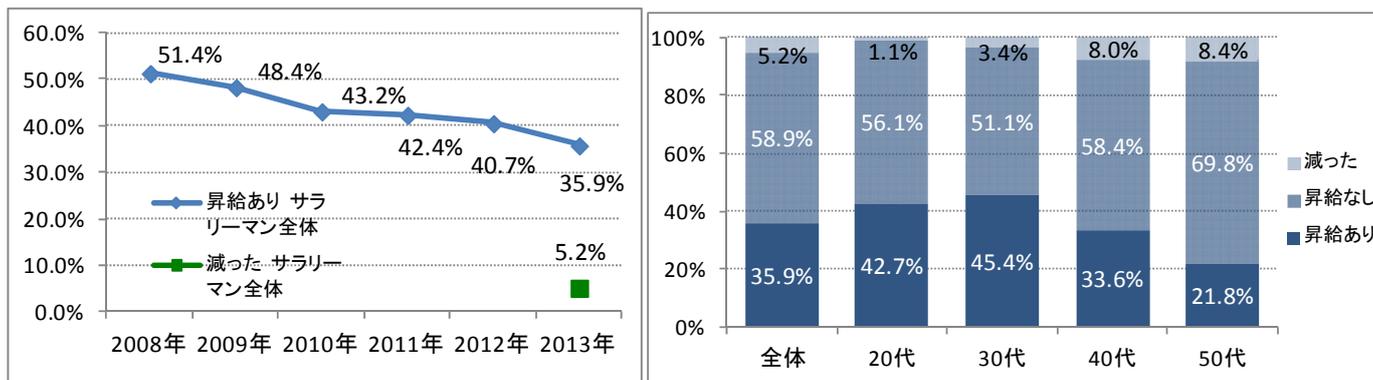
サラリーマン全体の平均および世代別の平均理想額

世代別で理想額が高かったのは 50 代、一番低いのは 40 代となっており、これは現実のお小遣い額と同様の傾向です。理想額は全世代で昨年よりも減っており、特に 40 代はその減少幅が大きく、40 代の現実のお小遣い額は昨年比 469 円増加しましたが、理想のお小遣いは控えめに見ているようです。

■ 昇給の状況とお小遣いとの関係

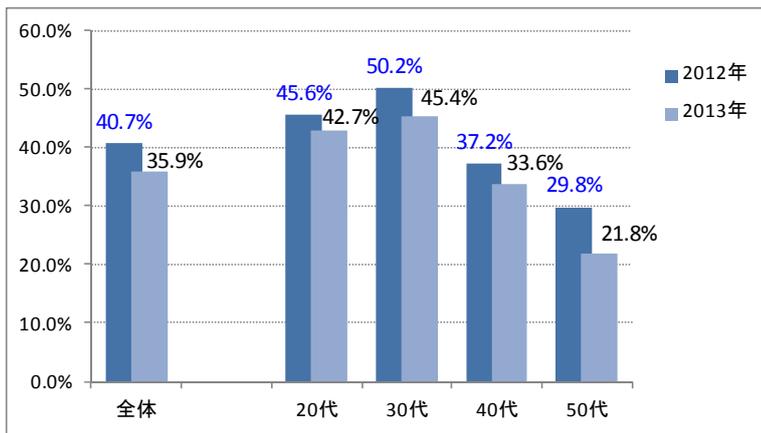
「昇給あり」と回答した割合は、昨年の 40.7%から 35.9%へ減少し、2008 年以降一貫して減少傾向が続いています。58.9%が現状維持とし、「減った」と回答した割合は 5%となっています。

設問：この一年(2012年4月～2013年3月)の間に昇給はありましたか？



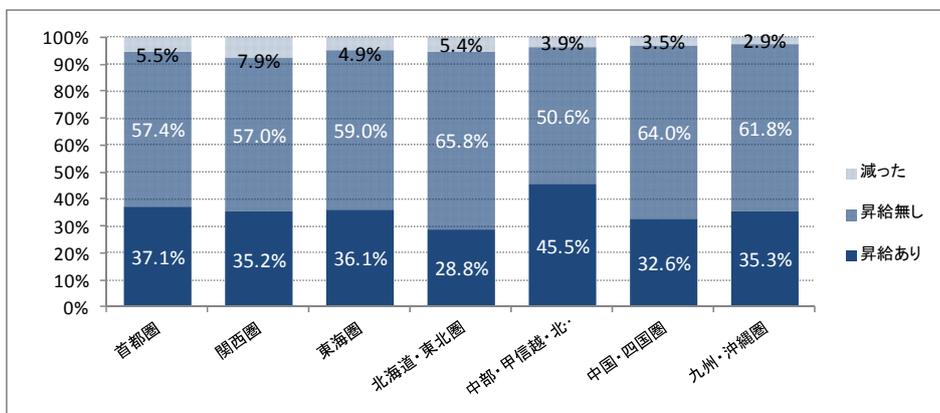
サラリーマン全体の平均 (2008年～2013年)

サラリーマン全体の平均および世代別内訳



2012年と2013年の「昇給あり」の世代別比較

世代別にみると、20代～30代では「昇給あり」の割合が高く、世代が上がるにつれてその割合が低くなります。また40代～50代では、「減った」割合が約8%と若い世代に比べて高くなっています。また、昨年と比較して、「昇給した」という割合は全ての世代で減少しています。

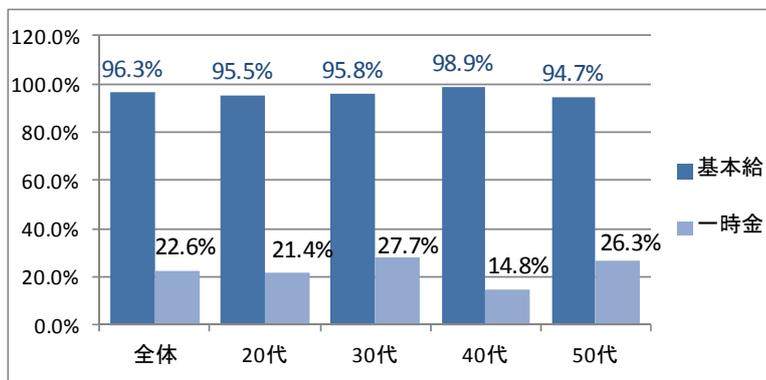


住んでいる地域別の昇給割合

地域別での「昇給あり」の割合は、北海道・東北圏が唯一の20%台の28.8%と低く、中部・甲信越・北陸圏では45.5%と高くなっています。一方、「減った」割合は、関西圏で7.9%と、他の地域に比べて高くなっています。

続いて、昇給の内訳と金額をみてみます。

設問：昇給があったと答えた方は、それぞれどのくらい昇給がありましたか？

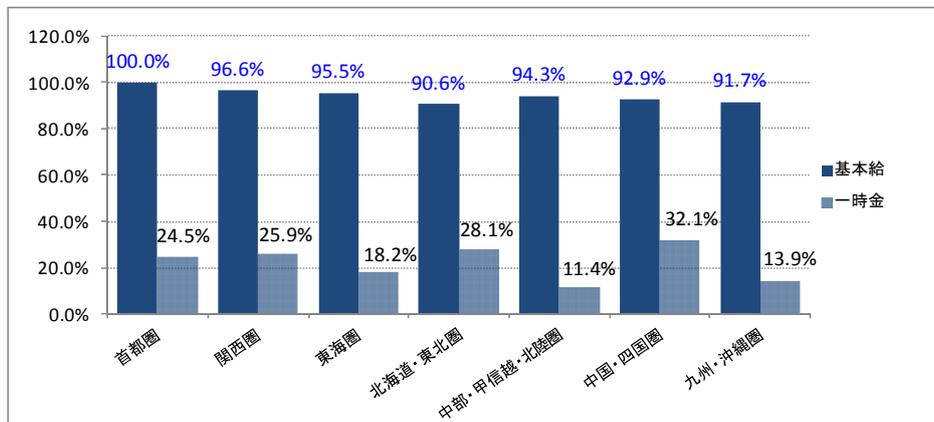


昇給したと回答した人の昇給内容の内訳。全体の平均および世代別。

	基本給	一時金
全体	9,606	42,460
20代	9,133	50,286
30代	11,257	37,952
40代	9,710	38,675
50代以上	6,749	46,728

全体の平均および世代別の内訳。

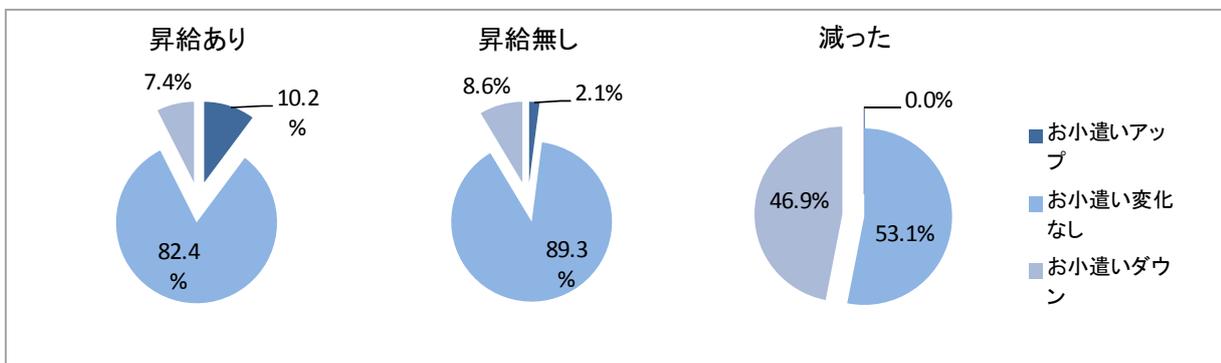
「基本給が上がった」人が 96.3%、「一時金が上がった」人が 22.6%となり、基本給が最も多くなっています。昇給金額は基本給が 9,606 円、一時金は 42,460 円となっています。世代別でもそれほど大きな差はありませんが、一時金が上がった割合では 30 代で多くっており、基本給の昇給金額も高くなっています。



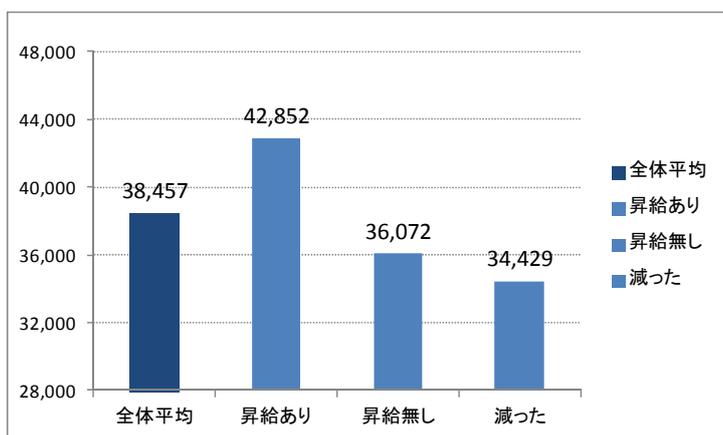
住んでいる地域別の昇給の内訳

地域別では、北海道・東北圏と中国・四国圏で、「一時金が上がった」割合が多く、一方で「基本給が上がった」割合は低くなっていることが特徴です。

最後に、昇給の有無とお小遣いの関係を見てみます。「お小遣いがアップした」と回答した人は、「昇給があった」と回答した人のうちの 10.2%であるのに対し、「昇給が無かった」人では 2.1%、「減った」と回答した人では 0%となっています。実際に昇給の有無別にお小遣い額の平均値を見ても、昇給ありは平均額よりも 4,028 円高い 42,852 円となっており、お小遣いのアップは昇給の有無が大きく影響しているようです。



昇給の有無別のお小遣い額の上昇の割合



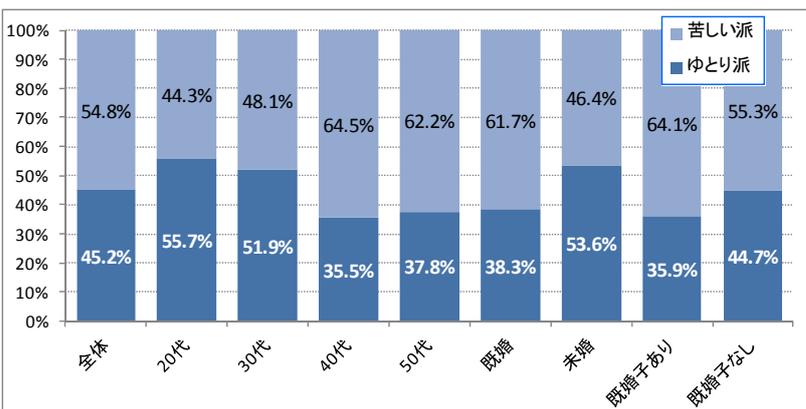
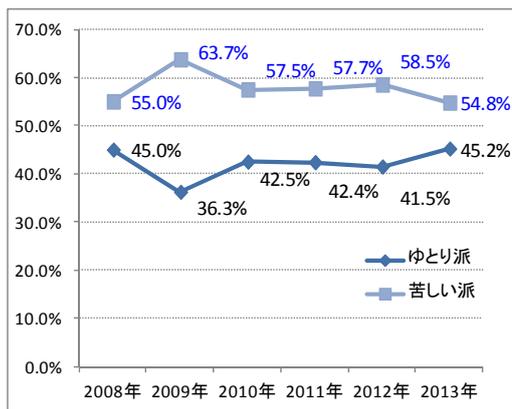
昇給の有無別にみたお小遣いの平均額

■ お小遣いにおけるゆとり実感

最後にお小遣いにおけるゆとり実感をみてみます。

お小遣い面からみた日常生活のゆとり度は、ゆとり派（「大いにゆとりがある」と「まあまあゆとりがある」の合計）は昨年の41.5%から3.7%回復して45.2%となり、苦しい派（「やや苦しい」、「大変苦しい」の合計）が3.7%減少の54.8%と僅かに弱まっています。

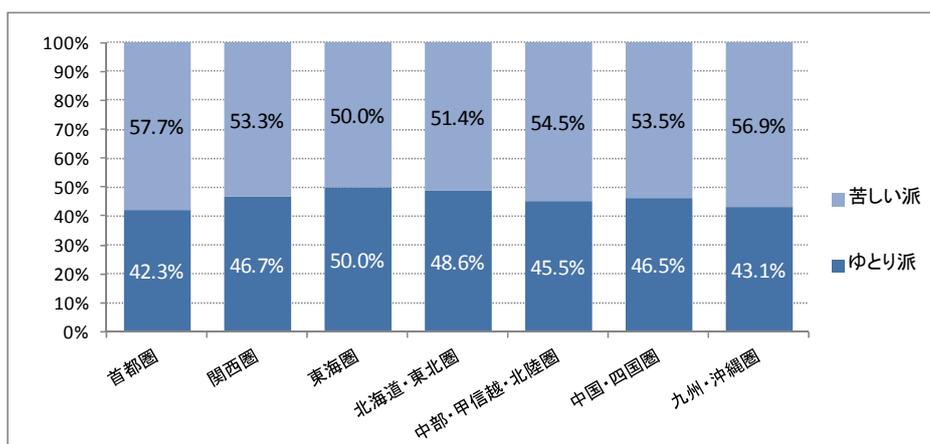
設問：お小遣い面からみて、この一年間のあなたの日常生活はいかがですか？



サラリーマン全体の平均（2008年から2013年まで）

サラリーマンの世代別、未婚別、既婚のうち子どもあり、無しの平均

世代別でみると、20代と30代はゆとり派が優勢（20代55.7%、30代51.9%）、40代と50代は苦しい派が優勢（40代64.5%、50代62.2%）となっており、世代間ギャップがはっきりと出ています。特に30代のゆとり派が昨年の43.6%から51.9%に回復しており、20代のゆとり派とともに全体平均を引き上げています。バブル崩壊以前は年齢が高いほど、余裕度が高かったのですが、近年はこの傾向がずっと続いています。また、お小遣い額と同様に、未婚の差が大きく、特に既婚で子どもがいる人は、苦しい派が64.1%と高めになっています。



住んでいる地域別のゆとり派、苦しい派の内訳

地域別では、首都圏、九州・沖縄圏で苦しい派が57.7%、56.9%と他の地域よりも高くなっており、一方、東海圏では、ゆとり派が多く唯一の50%となっています。

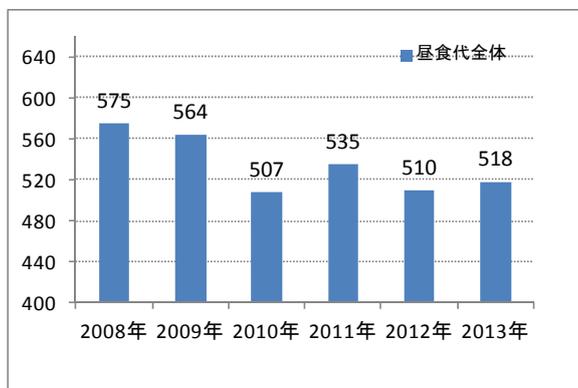
【2】サラリーマンの昼食事情

昼食代は昨年から8円上がって518円となり、ワンコインランチの傾向が続く。「持参弁当」30.7%と「購入した弁当」24.9%が最も多いが、「外食」19.2%の割合も昨年より増える。現在のランチについて、71.6%が満足と回答。

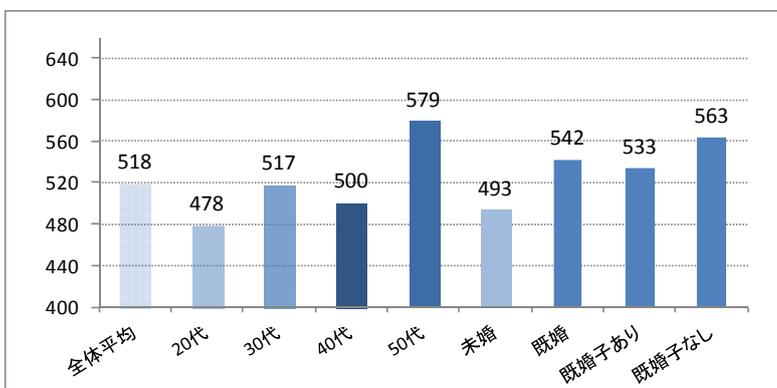
■ 昼食代

昼食代は昨年より8円上がって518円となり、2010年以降のワンコインランチの傾向が今も続いています。

設問：あなたの昼食代（勤務日）は平均すると一回いくらですか？（弁当持参時を除く）



サラリーマン全体の平均（2008年～2013年）



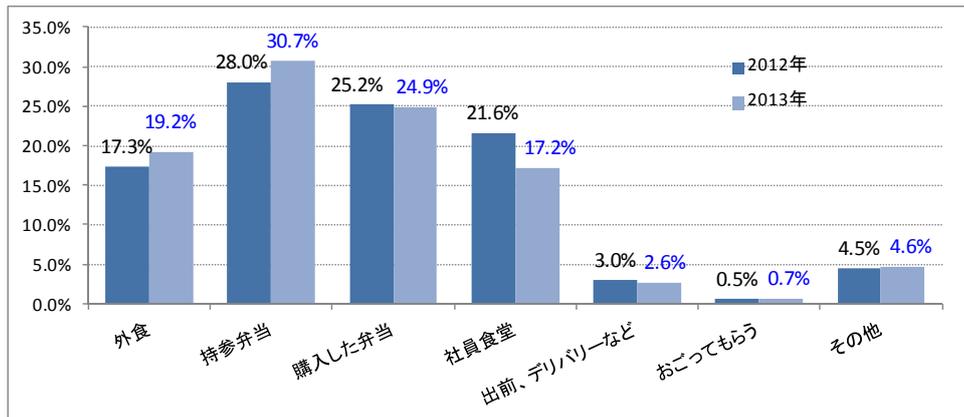
サラリーマンの世代別、未婚別、既婚のうち子どもあり、無しの平均

世代別では50代が昨年より60円増加して579円と最も高くなりました。未婚別では、未婚が2010年までは高い傾向が続いていましたが、昨年には既婚が僅かに上回り、今年は既婚が未婚よりも49円高い542円と逆転現象が起きています。ただ、既婚については、子どもなし層が563円と平均を押し上げていることが分かります。

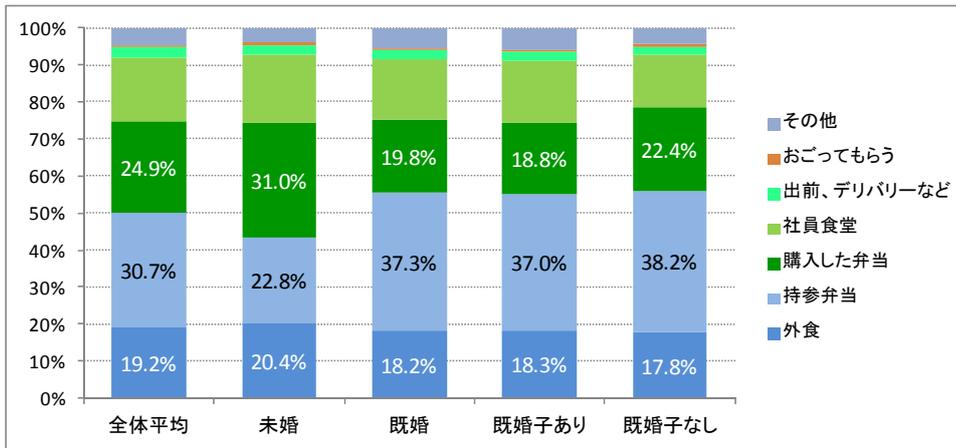
■ 昼食の内訳

昼食の内訳は、「持参弁当」30.7%、「購入した弁当」24.9%、「外食」19.2%の順に割合が多くなっています。「外食」と「持参弁当」については、昨年よりも割合が増える結果となっています。

設問：あなたの平均的な一週間の昼食（勤務日）のそれぞれの回数の内訳を教えてください。



サラリーマン全体の平均。回数の合計を100%として、それぞれの回数の割合を%で表しています。



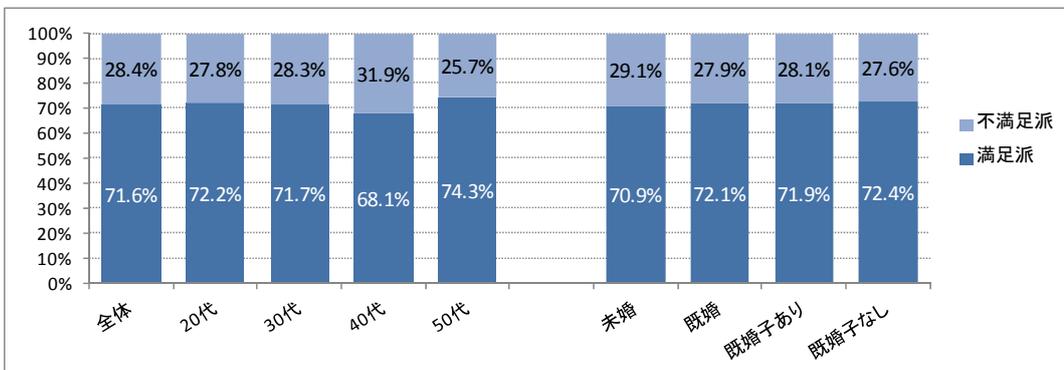
サラリーマン全体の平均と、未既婚別、既婚のうち子どもあり、無しの内訳。

未既婚の内訳でみると、未婚は「購入した弁当」31.0%の割合が多く、既婚は「持参弁当」37.3%の割合が高くなっています。既婚のうち、子どもなしでは「購入した弁当」22.4%の割合が比較的高くなっています。なお、持参弁当、購入弁当といえば飲み物がつきものですが、約18%の人が自宅から水筒を持参しているようです。(17ページの節約術を参照)

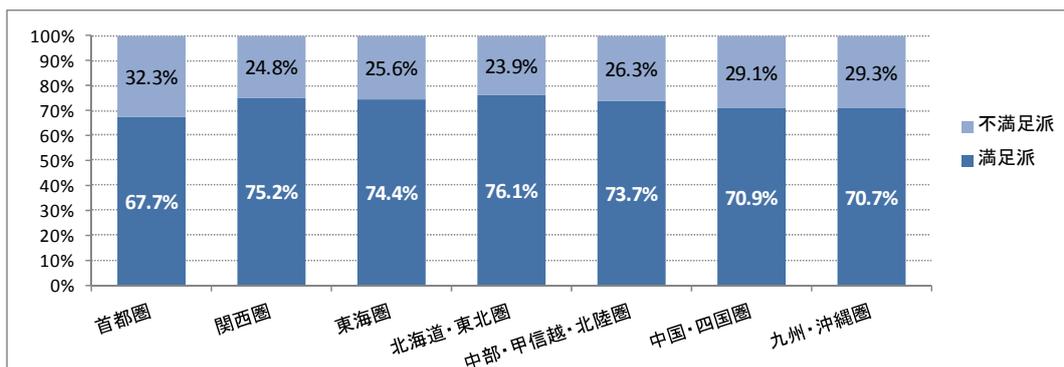
■ 昼食の満足度

昼食の満足派は71.6%、不満足派は28.4%となりました。

設問：あなたはいまの昼食に満足していますか？



サラリーマン全体の平均と、未既婚別、既婚のうち子どもあり、無しの内訳。満足派は「大いに満足している」と「まあまあ満足している」の合計、不満足派は「多少不満がある」「大いに不満がある」の合計。



住んでいる地域別の流職満足度の内訳

世代別では、満足派は40代が68.1%と低く、50代が74.3%と高くなっていますが、昼食代は50代が世代別で一番高いため、その影響とも思われます。地域別では、満足派が首都圏では67.7%と低く、北海道・東北圏では76.1%、関西圏では75.2%と高くなっています。

現在の昼食に対しての満足、不満足それぞれの理由も聞いていますのでいくつかご紹介します。

【持参弁当派】

満足派：「弁当持参で昼食代がかからないから」、「お金を使わないから」といった節約系、「安心だし美味しい栄養のバランスもよい」、「自分が食べる量やカロリー、栄養バランスを調整できる」といった栄養バランス系、「時間ロスがない」、「休憩時間を有意義に使える」といった時間短縮系の声もありました。また、「愛情がこもった愛妻弁当なので」、「嫁の作る弁当はおいしい」などの微笑ましい声もありました。中には、「昨年12月にランチジャーを購入して、毎日暖かいお弁当が食べられている」と先行投資をして持参のランチを楽しんでいる人や、「自分で好きなものを弁当で持参できる」と好きなものを弁当にして楽しんでいる人もいます。

不満足派：「作るのが面倒だし朝はゆっくりしたい」と手間がかかるといった意見、「外食をしたいが金銭的に厳しくできない」といった予算が限られており、仕方なく持参弁当をしている人もいます。「節約のためにおにぎり1個」といったストイックな声もありました。

【外食派】

満足派：「外食なので、好きなものを好きな時に食べられる」、「人と食べるとおいしいから」、「いろいろな店を毎日探しながらランチしているので楽しい」、「近くにおいしいお店が多いから」といった、外食ならではの楽しみを満喫している声が多く見られました。

不満足派：「お金がかかる」、「コストが高い。栄養のバランスが悪い」といったコスト高に対する不満が多くを占めていました。また、「職場の近くにおいしい店がない」といった選択肢が限られていることによる不満も中にはあるようですが、数としてはそれほど多くないようです。「朝と昼の2食にして食費を削ろうかと考えている」という、切羽詰まった声もありました。

【社員食堂派】

満足派：「種類も多く値段も安い」、「安くてボリュームがあり日替わりの定食が食べられる」、「毎日違ったものが食べられる」と、味と値段のコストパフォーマンスの良さをあげる声が多く見られました。中には、「社員食堂の他、近くの大学の学食におじゃましていますが、安くて野菜も多く満足です。」と近くの施設も活用して楽しんでいる人もいます。

不満足派：「メニューの数が少ない」といった意見や、「値段が安いけど、おいしくない」といった、味に不満を持っている人が多く見られました。

【購入弁当派】

満足派：「価格の割には美味だから」といった意見もありますが、「昼食に執着が無い」、「不満はない」といったコメントが中心で、積極的に歓迎するような声はほぼありませんでした。

不満足派：「バリエーションに乏しい気がする」、「おいしくない、栄養が足りない」、「美味しい物を食べたい」といった質やバリエーションに対する不満が中心です。「経済的な事を考えると購入する物も限定されるので、その辺でストレスが溜まる事がある」といった声もありました。

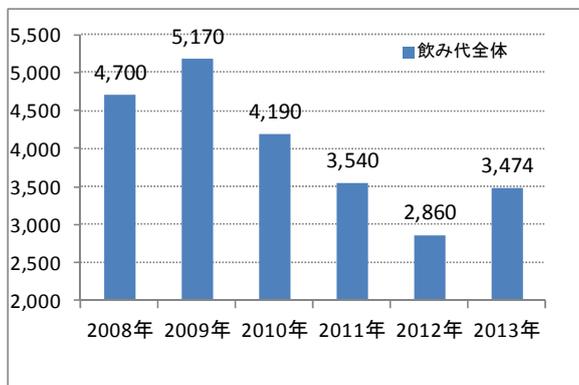
【3】サラリーマンの飲み事情

一回の飲み代は昨年から 614 円増えて 3,474 円。
 月の回数は 0.2 回減って 2.2 回となり、回数を減らして単価が上がる傾向に。
 特に 40 代、50 代の飲み代の増加が顕著。

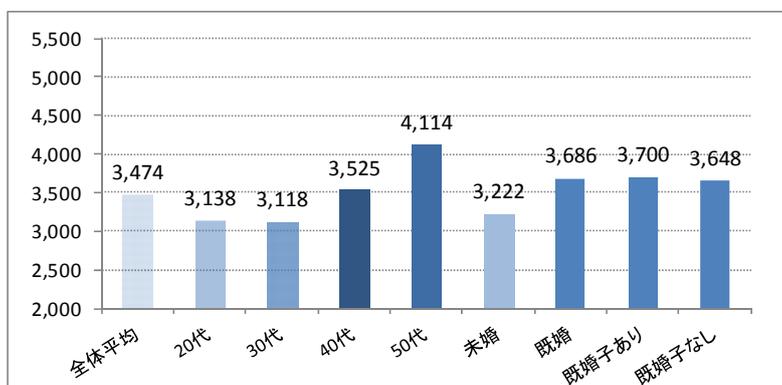
■ 一回の飲み代

一回の飲み代は、昨年から 614 円増えて 3,474 円となり、2011 年の 3,540 円並みに回復しました。ただし、一回の飲み代の金額としては、依然として 1999 年の調査開始以来、3 番目の低い水準となっています。（最低額は 2012 年の 2,860 円、2 番目は 1999 年の 2,967 円。）

設問：あなたの飲み代は平均すると一回いくらですか？



サラリーマン全体の平均 (2008 年～2013 年)



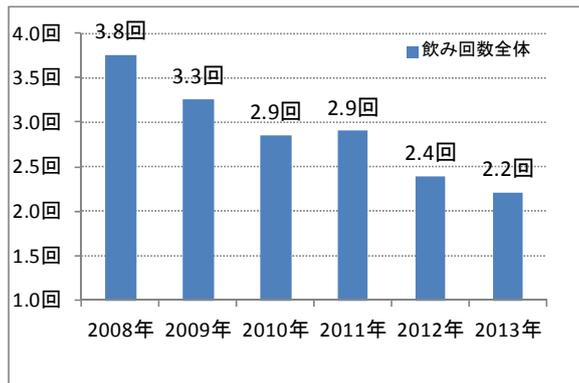
サラリーマンの世代別、未婚別、既婚のうち子どもあり、なしの平均

世代別では、40 代、50 代の増加が顕著で、それぞれ昨年から 905 円、1,284 円と大幅増となりました。50 代では飲み代が 4,114 円と、唯一 4 千円台を回復して、全体平均を引き上げています。未婚別では、未婚よりも既婚が多くはなっていますが、その世代別内訳を見ると、20 代の既婚子なし層が 2,698 円と唯一の 2 千円台。50 代以上の既婚者は 4,772 円と 5 千円近くまで回復しています。

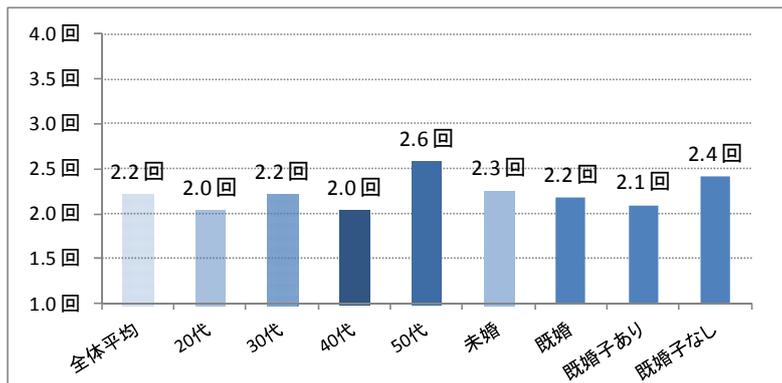
■ 1 か月の飲み回数

1 か月の平均飲み回数は、昨年から 0.2 回減って 2.2 回となりました。右肩下がり傾向が続いています。

設問：仕事が終わった後、1 か月で平均何回くらいお酒を飲みに行きますか？



サラリーマン全体の平均 (2008 年～2013 年)



サラリーマンの世代別、未婚別、既婚のうち子どもあり、無しの平均

2012年度に調査した「ランチの際にお店を選ぶポイント」と比較すると、ランチの上位は「価格が安い、手頃」が74.3%、「場所が近い、便利」が50.6%、「料理がおいしい」が27%となっており、リーズナブルで利便性が高いところは共通していますが、お酒を飲むお店を選ぶ際には、「料理のおいしさ」や「お店の雰囲気」も重視していることがわかります。

特に1か月の飲み代が大幅に回復した50代を見てみると、価格や利便性は重視しながらも、他の世代と比べて「料理のおいしさ」、「お店の雰囲気」、「店員の感じの良さ」を重視する割合が高くなっています。もちろんこのようなお店はある程度高くなると思われるので、これが50代の飲み代が上がった理由の一つかもしれません。

【4】お小遣いの使い道、やりくり術

必要不可欠な使い道は、「昼食代」53.6%、「飲み代」37%、「趣味の費用」35.1%。
 「飲み代」は3位から2位に浮上。
 約7割が何らかのお小遣いの節約策をとっており、一部では「副収入」などで補てん。

■ お小遣いの使い道と費用

お小遣いの使い道は、「飲み代」が3位から2位に浮上しましたが、トップ3は昨年と変わらず、「昼食代」53.6%、「飲み代」37%、「趣味の費用」35.1%となりました。

設問：あなたのお小遣いの使い道として、必要不可欠なものは何ですか？（複数回答可）

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年
1位	昼食代 48.0%	昼食代 57.2%	昼食代 52.9%	昼食代 51.4%	昼食代 48.8%	昼食代 53.6%
2位	趣味の費用 42.0%	趣味の費用 50.6%	趣味の費用 45.7%	趣味の費用 48.3%	趣味の費用 40.2%	飲み代 37.0%
3位	嗜好品代 32.2%	飲み代 44.8%	飲み代 39.0%	嗜好品代 37.0%	飲み代 36.0%	趣味の費用 35.1%
4位	飲み代 28.8%	嗜好品代 42.2%	嗜好品代 35.4%	飲み代 35.9%	携帯電話代 32.9%	携帯電話代 34.0%
5位	書籍・雑誌代 25.8%	書籍・雑誌代 37.2%	書籍・雑誌代 29.7%	書籍・雑誌代 28.8%	車関連・ガソリン代 29.0%	嗜好品代 30.5%
6位	車関連・ガソリン代 21.2%	携帯電話代 27.4%	携帯電話・通信費 29.5%	車関連・ガソリン代 26.6%	書籍・雑誌代 28.5%	書籍・雑誌代 28.1%
7位	携帯電話代 16.6%	車関連・ガソリン代 25.0%	車関連・ガソリン代 24.9%	携帯電話代 25.1%	嗜好品代 25.9%	車関連・ガソリン代 27.8%
8位	喫茶代 10.4%	身だしなみ費用 22.4%	身だしなみ費用 18.9%	身だしなみ費用 19.4%	パソコン関連・通信料 21.4%	喫茶代 21.2%
9位	身だしなみ費用 8.4%	衣服代 18.8%	衣服代 15.7%	家族への気配り 16.9%	家族への気配り 17.4%	身だしなみ費用 19.5%
10位	衣服代 8.0%	家族への気配り 18.6%	家族への気配り 15.3%	衣服代 15.5%	ファッション費用 16.5%	パソコン関連・通信料 18.1%

サラリーマン全体の平均（2008年～2013年）

	全体	20代	30代	40代	50代
1位	昼食代 53.6%	昼食代 57.3%	昼食代 49.2%	昼食代 56.5%	昼食代 51.5%
2位	飲み代 37.0%	携帯電話代 41.6%	携帯電話代 34.0%	飲み代 41.2%	飲み代 43.9%
3位	趣味の費用 35.1%	趣味の費用 31.3%	飲み代 33.6%	趣味の費用 37.4%	嗜好品代 38.9%
4位	携帯電話代 34.0%	飲み代 29.4%	趣味の費用 33.6%	携帯電話代 31.7%	趣味の費用 38.2%
5位	嗜好品代 30.5%	嗜好品代 26.3%	書籍・雑誌代 27.5%	車関連・ガソリン代 30.5%	書籍・雑誌代 32.8%
6位	書籍・雑誌代 28.1%	車関連・ガソリン代 24.4%	嗜好品代 26.3%	嗜好品代 30.5%	車関連・ガソリン代 31.3%
7位	車関連・ガソリン代 27.8%	書籍・雑誌代 24.0%	車関連・ガソリン代 24.8%	書籍・雑誌代 28.2%	携帯電話代 28.6%
8位	喫茶代 21.2%	ファッション費用 22.5%	ファッション費用 16.4%	喫茶代 26.3%	喫茶代 27.9%
9位	身だしなみ費用 19.5%	身だしなみ費用 21.0%	パソコン関連・通信料 16.0%	遊興費 19.8%	遊興費 23.3%
10位	パソコン関連・通信料 18.1%	パソコン関連・通信料 19.5%	身だしなみ費用 15.6%	パソコン関連・通信料 19.8%	身だしなみ費用 22.1%

サラリーマン全体と世代別の順位（2013年）

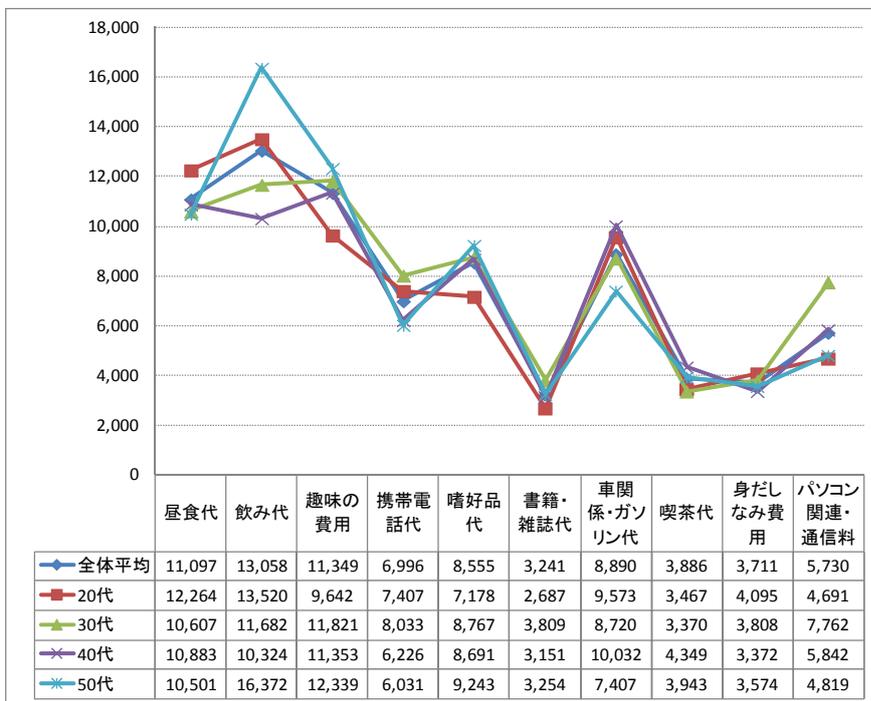
2位に浮上した「飲み代」は、世代が上がるにつれて選択率が高くなり、飲み代が多かった50代にその傾向が強いです。また、昨年8位に入っていた「家族への気配り」はトップ10から外れて、代わりに喫茶代（カフェ代など）が7位に上がっています。こちらも40代と50代の選択率が高くなっていることが特徴です。20代と30代では、携帯電話代が2位に入っており、40代、50代との世代間に差が見られます。

次にそれぞれの項目ごとに、月々に必要な金額をみます。

上位から、「飲み代」13,058円、「趣味の費用」11,349円、「昼食代」11,097円の順となっています。

この中で、世代格差が大きいものは、「飲み代」(50代:16,372円-40代:10,324円=6,047円差)となっており、50代が高くなっています。

トップ10以外では、「交際相手への気配り」が10,432円の差(20代14,686円、50代4,255円)、「自己啓発」が7,890円の差(20代10,841円、40代2,951円)、「遊興費」が6,578円差(30代15,159円、40代8,581円)とそれぞれの世代で特徴が出ています。



■ お小遣いのやりくり、不足時の対応

約7割(68.2%)が何らかの節約策をとっており、目立つのは「昼食費を安くする」24.9%、「衝動買いをしない」17.9%、「水筒を持参する」17.8%となっています。

設問：あなたは、お小遣い面でみて、ここ最近、何らかの自衛策を講じていますか。あてはまるものをいくつでも選んでください。

	2012年	2013年
1位	昼食代 31.1%	昼食代 24.9%
2位	飲む回数 22.3%	衝動買い 17.9%
3位	衝動買い 21.8%	水筒持参 17.8%
4位	ネットやバーゲンで安価購入 21.5%	少しでも歩く 16.9%
5位	水筒持参 20.1%	飲む回数 16.3%
6位	交通費 18.5%	弁当持参 15.9%
7位	タクシー乗車 17.8%	ネットやバーゲンで安価購入 15.9%
8位	弁当持参 17.4%	タクシー乗車 15.6%
9位	書籍・雑誌代 14.2%	書籍・雑誌代 13.4%
10位	服飾費 12.9%	交通費 10.7%

サラリーマン全体の平均 (2012年~2013年)

	全体	20代	30代	40代	50代
1位	昼食代 24.9%	昼食代 27.9%	昼食代 20.6%	昼食代 29.4%	昼食代 21.8%
2位	衝動買い 17.9%	水筒持参 20.6%	水筒持参 17.2%	ネットやバーゲンで安価購入 22.5%	飲む回数 20.2%
3位	水筒持参 17.8%	弁当持参 20.2%	衝動買い 17.2%	衝動買い 21.8%	タクシー乗車 17.9%
4位	少しでも歩く 16.9%	少しでも歩く 19.1%	書籍・雑誌代 15.3%	水筒持参 21.4%	衝動買い 17.2%
5位	飲む回数 16.3%	衝動買い 15.6%	ネットやバーゲンで安価購入 15.3%	少しでも歩く 18.7%	少しでも歩く 17.2%
6位	弁当持参 15.9%	飲む回数 14.5%	飲む回数 14.5%	タクシー乗車 17.2%	弁当持参 15.6%
7位	ネットやバーゲンで安価購入 15.9%	タクシー乗車 13.7%	弁当持参 14.1%	飲む回数 16.0%	書籍・雑誌代 14.5%
8位	タクシー乗車 15.6%	交通費 13.4%	タクシー乗車 13.4%	書籍・雑誌代 15.3%	ネットやバーゲンで安価購入 14.1%
9位	書籍・雑誌代 13.4%	ネットやバーゲンで安価購入 11.8%	少しでも歩く 12.6%	弁当持参 13.7%	喫茶代 12.6%
10位	交通費 10.7%	服飾費 11.1%	交通費 11.5%	服飾費 13.4%	水筒持参 12.2%

サラリーマン全体と世代別の順位 (2013年)

昨年と比較すると、自衛策としての「飲む回数」の順位が下がり、「水筒持参」が順位を上げています。これは20代と30代で2位となっており、世代が上がるにつれてその順位が低くなっています。「弁当持参」も20代では3位ですが、それ以上の世代ではその傾向が弱まります。

では、節約しても足りなくなってしまう時はどうしているのかをみます。

設問：お小遣いが足りなくなった時、あなたはどのようにやりくりしていますか？（いくつでも）

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年
1位	使わずに我慢 55.2%	使わずに我慢 55.8%	使わずに我慢 54.6%	使わずに我慢 60.1%	使わずに我慢 70.2%	使わずに我慢 67.7%
2位	預貯金を取り崩す 29.6%	預貯金を取り崩す 35.2%	預貯金を取り崩す 32.4%	預貯金を取り崩す 33.0%	預貯金を取り崩す 30.1%	預貯金を取り崩す 25.1%
3位	家計から捻出 24.8%	家計から捻出 22.4%	家計から捻出 26.0%	家計から捻出 22.8%	家計から捻出 19.2%	家計から捻出 18.0%
4位	クレジットカードを利用 19.0%	クレジットカードを利用 15.2%	クレジットカードを利用 11.9%	クレジットカードを利用 12.1%	クレジットカードを利用 10.7%	クレジットカードを利用 12.4%
5位	アルバイト 1.8%	アルバイト 1.6%	アルバイト 2.9%	アルバイト 1.8%	アルバイト 3.6%	副収入 7.8%
6位	親・兄弟から借金 0.8%	親・兄弟から借金 1.4%	親・兄弟から借金 2.5%	親・兄弟から借金 1.6%	親・兄弟から借金 3.5%	親・兄弟から借金 3.5%
7位	友人・知人から借金 0.2%	友人・知人から借金 0.6%	友人・知人から借金 1.1%	友人・知人から借金 0.4%	友人・知人から借金 0.2%	アルバイト 3.1%

サラリーマン全体の平均（2008年～2013年）。2013年から選択肢に副収入を追加。

	全体	20代	30代	40代	50代
1位	使わずに我慢 67.7%	使わずに我慢 72.1%	使わずに我慢 70.6%	使わずに我慢 67.6%	使わずに我慢 60.7%
2位	預貯金を取り崩す 25.1%	預貯金を取り崩す 26.7%	預貯金を取り崩す 24.8%	預貯金を取り崩す 23.7%	預貯金を取り崩す 25.2%
3位	家計から捻出 18.0%	家計から捻出 14.9%	家計から捻出 19.8%	家計から捻出 18.3%	家計から捻出 19.1%
4位	クレジットカードを利用 12.4%	副収入 9.5%	クレジットカードを利用 11.8%	クレジットカードを利用 16.0%	クレジットカードを利用 13.4%
5位	副収入 7.8%	クレジットカードを利用 8.4%	副収入 7.6%	副収入 9.5%	副収入 4.6%
6位	親・兄弟から借金 3.5%	親・兄弟から借金 5.7%	アルバイト 4.6%	親・兄弟から借金 3.1%	アルバイト 3.1%
7位	アルバイト 3.1%	アルバイト 2.3%	親・兄弟から借金 3.1%	アルバイト 2.7%	親・兄弟から借金 2.3%

サラリーマン全体と世代別の順位（2013年）

上位から、「使わずに我慢する」67.7%、「預貯金を取り崩す」25.1%、「家計から捻出する」18%となっており、今年も足りない場合は我慢をする傾向が強くなっています。今年から追加した選択肢「副収入を得る（FXや株式の売買、ネットオークションなどの手段で得られた収益）」が7.8%と5位になっており、世代別では20代と40代が9.5%と比較的多くなっています。

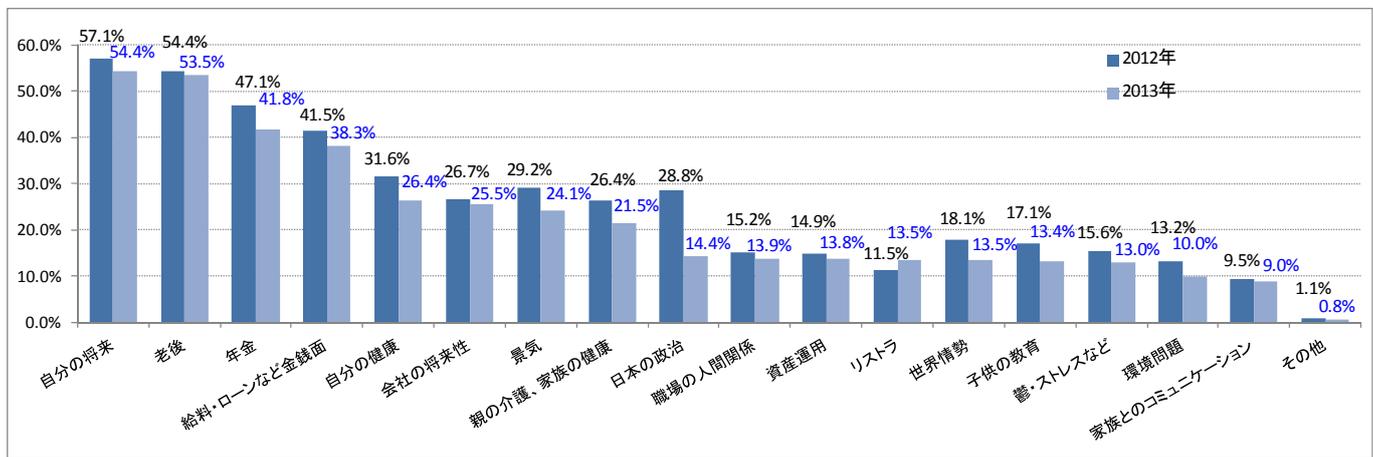
【5】不安に感じていること

**「自分の将来」54.4%、「老後」53.5%、「年金」41.8%が3大不安。
「政治」に対する不安は大幅減。**

■ 最近感じている不安

順位は昨年と変わらず、上位から「自分の将来」54.4%、「老後」53.5%、「年金」41.8%、「給料・ローンなどの金銭面」38.3%となっています。

設問：あなたは、最近どのようなことに不安を感じていますか。あてはまるものをいくつでも選んでください。



サラリーマン全体の平均（2012年～2013年）

	全体	20代	30代	40代	50代
1位	自分の将来 54.4%	自分の将来 64.5%	自分の将来 56.1%	老後 64.5%	老後 63.7%
2位	老後 53.5%	老後 38.5%	老後 47.3%	自分の将来 60.7%	年金 51.9%
3位	年金 41.8%	給料・ローン 34.7%	給料・ローン 38.9%	給料・ローン 48.1%	自分の将来 36.3%
4位	給料・ローン 38.3%	年金 29.0%	年金 38.2%	年金 32.1%	自分の健康 32.1%
5位	自分の健康 26.4%	会社の将来 24.4%	会社の将来 29.8%	自分の健康 32.1%	給料・ローン 31.3%
6位	会社の将来 25.5%	景気 24.0%	自分の健康 23.7%	家族介護・健康 26.7%	家族介護・健康 27.1%
7位	景気 24.1%	自分の健康 17.9%	景気 22.9%	会社の将来 26.7%	景気 23.7%
8位	家族介護・健康 21.5%	鬱・ストレス 16.4%	家族介護・健康 18.7%	景気 26.0%	会社の将来 21.0%
9位	日本の政治 14.4%	職場人間関係 13.4%	日本の政治 17.9%	リストラ 18.3%	資産運用 16.8%
10位	職場人間関係 13.9%	家族介護・健康 13.4%	子供の教育 17.2%	子供の教育 17.9%	日本の政治 12.6%

サラリーマン全体と世代別の順位（2013年）

世代別で見ると、20代では「自分の将来」の不安（64.5%）が大きいですが、30代になるとより具体的に「会社の将来」に移り、40代や50代と年齢が上がると「老後」（63.7%）、「年金」（51.9%）に対する不安が大きくなるという世代別の特徴が見られます。

2013年からは年金の支給開始年齢が段階的に引き上げられ、また、2013年4月から施行された「改正高年齢者雇用安定法」により、65歳までの雇用延長が企業に義務付けられましたが、昨年から大きな変動は無く、この結果をみる限りその影響は見られませんでした。

昨年末に政権交代を果たした「日本の政治」に対する不安は、2010年37.8%、2012年28.8%、そして今年は14.4%と急激に下がっています。また、「景気」についても、昨年の29.2%から、今年は24.1%と減少しています。この点はアベノミクスに期待する心理が表れているのかもしれませんが。

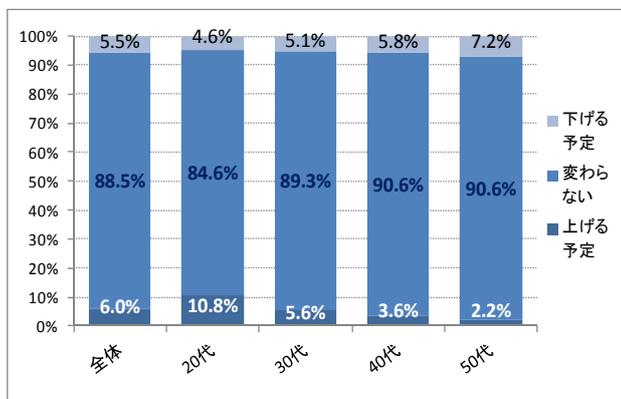
【6】お小遣いアップの可能性

**お小遣いを「上げる予定」とした人はわずか6%。
お小遣いの回復は“昇給”が鍵に。**

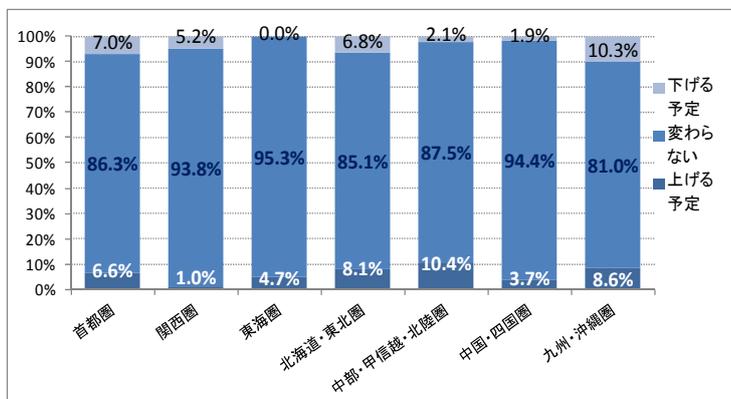
■ お小遣いアップの可能性

家計の主導権を握っていると回答した人のうち、今後のお小遣いを「上げる予定」とした人はわずか6%でした。

設問：今後、お小遣いアップの可能性はありますか？

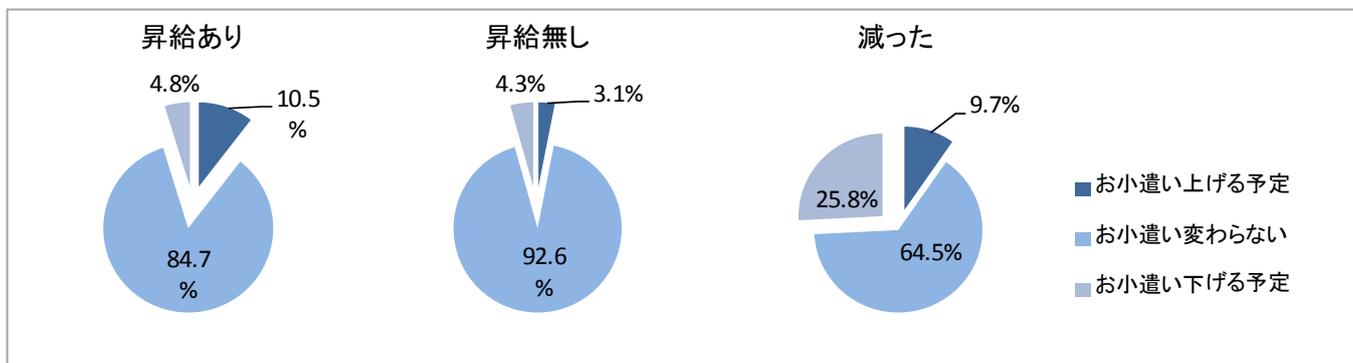


サラリーマン全体の平均（2012年～2013年）。家計の主導権を握っている人ベース。



住んでいる地域別の平均

今後のお小遣いを「下げる予定」とした人も5.5%と同程度となっており、「変わらない」人が88.5%と9割弱を占めています。世代別でみると、上げる予定とした人は20代が10.8%と比較的多くなっていますが、世代が上がるにつれてその割合が減って、反対に下げる予定とする割合が増える傾向がみられます。地域別では、中部・甲信越・北陸圏が10.4%と最も高くなっており、関西圏はわずか1%と最も低くなっています。九州・沖縄圏では下げる予定とした割合が10.3%と最も高くなっています。



昇給の有無別、お小遣い額アップの可能性の割合

■ お小遣いアップは、収入の増加による家計負担と将来の不安の緩和が鍵

今年の調査では、アベノミクス効果で一部の企業の業績も上向き、株価も上昇したとはいえ、サラリーマンのお小遣いにはまだその恩恵が十分におよんでいないという結果となりました。昇給の割合も下がり、節約をしている人が大勢を占め、現時点ではまだ守りの傾向が優勢です。実際の家計においては、2012年度は電気料金の上昇や円高に伴う一部の生活必需品や食品などの値上げがあり、また来年からは消費税の増税などが予定されています。

昇給の状況とお小遣いとの関係（9ページ）でみたように、お小遣いを実際に上げた人は昇給した人が多くを占めており、この「お小遣いアップの可能性」の設問でお小遣いを「上げる予定」と回答した人も、昇給があった人が10.5%と多くを占めているように、“昇給”がお小遣い回復のキーワードとなります。収入の増加で家計の負担と将来の不安も緩和されること、その二つの条件が整えば、お小遣いのアップ、ひいては安定した消費回復につながっていくことでしょう。この景気回復基調が確実なものとなり、サラリーマンの収入も増え、それがお小遣いにも現れてくることを期待したいと思います。